

大原野に眠る古墳時代の首長

— 芝古墳の調査 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

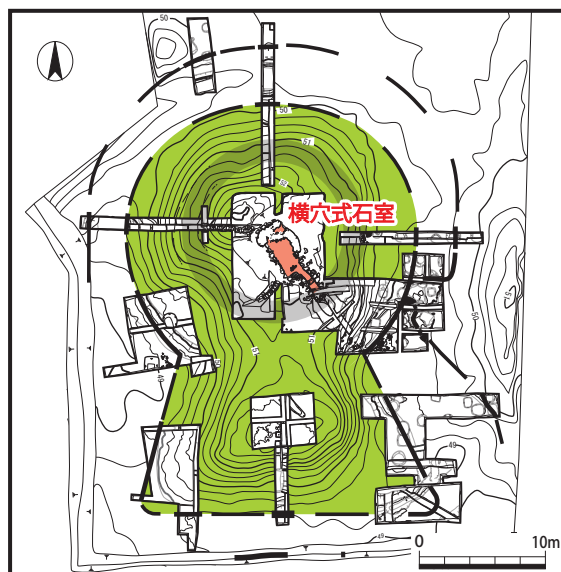
はじめに 日本国内では現在までに 16 万基以上もの古墳が確認されています。京都盆地にも多くの古墳が存在しますが、その分布は盆地の西部、桂川の西岸に集中します。

特に西岸の乙訓地域では、約 400 基の古墳が確認されています。この中で前方後円墳や、規模等が突出したものを「首長墓」と呼びますが、乙訓地域は、この首長墓が古墳時代を通して築造された全国的にも稀な地域です。そして各古墳の調査・研究は古墳時代研究の礎となっています。

今回紹介する芝古墳は、西京区おおはらのいわみちよう大原野石見町に所在する前方後円墳で、古墳時代後期の首長墓です(図1)。平成25年から平成29年にかけて、京都市が保存を目的とした調査を実施し、その実態が明らかになりました。



写真1 横穴式石室全景(南東から)



- 墳 形：前方後円墳(2段築成)
 外表施設：埴輪(普通円筒・朝顔形)
 周溝、陸橋
 規模：全長 37m 以上、墳丘長 32.3m
 後円部径 22.8m、前方部長 12.5m
 埋葬施設：横穴式石室(全長 3.55m 以上)
 副葬品：土師器・須恵器・馬具・鉄剣・鉄鏃
 刀子・臼玉
 時期：古墳時代後期前葉(6世紀前葉)

図1 芝古墳の基本データ

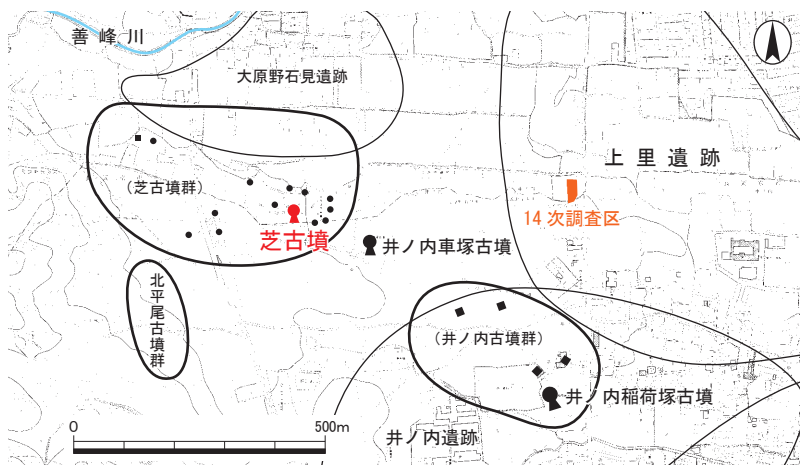


図2 周辺の遺跡と古墳（1：15,000）

立地 善峰川南岸の低位段丘上、標高およそ 50mの場所に立地します（図2）。芝1号墳とも呼ばれ、14基の古墳から構成される芝古墳群の中では唯一の前方後円墳です。

墳丘 芝古墳の墳丘下部は、元々の地盤を削り出しており、その上に後円部では3m以上、前方部では2.7m以上の土を盛って構築しています。

埋葬施設 後円部中央には、南東方向に入口がある横穴式石室があります（図1、写真1）。横穴式石室とは、古墳時代中期に新たに導入された埋葬施設で、棺を納める部屋（げんしつ 玄室）と、墳丘の外部から玄室を結ぶ通路（せんどう 羨道）を石積みで構築したものです。芝古墳で見つかった石室は、現時点で乙訓地域で最古級のものであり、その導入や構造を考えると貴重な遺構です。奈良時代以降に石材が抜き取られています、部分的に石積みが残っていました。なお、石組み溝が石室の北西隅と南西隅に設けられています、このような場所に石組み溝を設ける事例は、あまり見られません。また、芝古墳で使用されている石材は、北側の善峰川から採取されたと考えられます。

この石室の入口は通常ふさがれており、内部を見ることができない構造となっています。使用の度に通路を掘り直して石室内部に出入りしていたようです。また、この墓道をふさぐように4基の埴輪が据えられていました。

副葬品 石室の中からは、食器の高杯や貯蔵器の壺・甕・横瓶がまとまって出土しました。また、遺体や棺に塗布されたと考えられる水銀朱が玄室の西壁に沿って見つかりました。

被葬者 乙訓地域の南部では、古墳時代中期前半に最大規模を誇るいげのやま 恵解山古墳が築造されますが、それ以降はしばらく首長墓が確認できなくなります。しかしその後、古墳時代中期末から後期前半に芝古墳や井ノ内車塚古墳、井ノ内稲荷塚古墳など、小規模ではありますが、それまで途絶えていた首長墓が再び姿を現します。

この背景として、518年に継体天皇によって造られた「けいたい おとくにのみや 弟国宮」の存在が注目されます。

芝古墳の東側には、同時期の集落である上里遺跡が存在します。上里遺跡では多数の建物と区画施設が確認されており、この地域の中心地

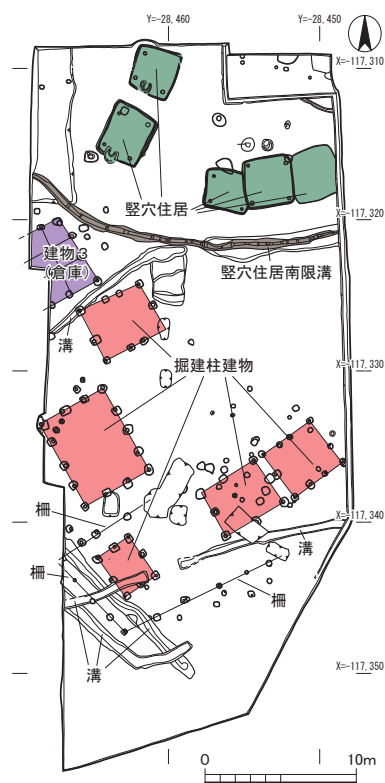


図3 上里遺跡14次調査平面図（1：500）

であったと考えられます（図3）。また芝古墳では、当時導入され始めた最新式の埋葬施設である横穴式石室が設けられています。

以上の要素を踏まえると、芝古墳の被葬者は大原野地域に本拠地をもつ有力者であり、かつ古墳時代後期にヤマト政権中枢部との関係を強く持った新興勢力の長と考えられます。また、「弟国宮」の存在をあわせて考えると、芝古墳には継体天皇に協力した人物が眠っているのかもしれません。

なお、芝古墳は平成30年2月に「国指定史跡 乙訓古墳群」に追加指定され、令和6年3月に整備工事が完了予定です。現地を訪れ、古墳に眠る名も知れぬ被葬者に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

（文化財保護課 熊井亮介）